

中国貨幣の歴史

14 南北朝時代の貨幣① —南朝の貨幣—

「宋」の貨幣



「四銖」銭

「こうけん孝建四銖」銭

宋では、「四銖」銭や「孝建四銖」銭（表に年号「孝建」、裏に「四銖」銘）を铸造・発行する。後に、「四銖」の銭銘はなくなり、当初の四銖の重さは二銖程度にまで軽量化した。

「梁」の貨幣



鉄「五銖」銭

「りょうちゆう兩柱（二柱）五銖

梁では、銭貨不足に対し、鉄の「五銖」銭を発行するが混乱を招く。梁末期には、「五銖」銭の銭面に点を加えた兩柱（二柱）五銖銭（10銭相当）などを発行し、銅銭の名目価値の引上げを企図する。

「陳」の貨幣



「五銖」銭

「たいか太貨六銖」銭

陳では、「五銖」銭（3g程度）と、「五銖」銭10枚相当での通用を目論んだ「太貨六銖」銭（4g強）を铸造・発行するが、市場には受け入れられず廃止された。

南朝の貨幣

南北朝時代の南朝では、慢性的な銭貨不足と貨幣需要の増大のなかで、原料銅不足から銭貨供給が追いつかず、数少ない良銭は貴族等富裕層に集中し、市場では悪銭主体の貨幣流通が続いていた。各王朝では、名目価値を引き上げた銭貨や鉄を原料とした銭貨の铸造を試みたが、銭貨不足の状況を解消するには至らなかった。

（写真は全て実物×100%）

五胡十六国時代に続く5～6世紀の中国は、南と北にそれぞれ統一王朝が並び立ち、それらが対立・拮抗する南北朝時代となる。江南では、「東晋」の後、「宋」、「齊」、「梁」、「陳」の4王朝が興亡する。一方、華北では、鮮卑族の拓跋氏による「北魏」が五胡諸国を平定し中国北部全域を統一（439年）する。

南朝の江南地域では、水田開発の進展により稲作農業が発達し、商業活動も徐々に活発化していく。豪族や貴族は農民を小作農とする荘園経営を拡大し、この時期には「六朝文化」と呼ばれる貴族文化が形成される。江南では、東晋期以降も悪銭中心ながら銭貨流通が継続していたが、経済発展とともに貨幣需要が増大し、各王朝は銭貨不足への対応を迫られる。

「宋」（420～479年）では、430年、それまでの「五銖」銭の伝統から離れ、重さを四銖（約2.6g）とし銘文も「四銖」とした銭の鑄造・発行をはじめた。しかし、深刻な原料銅の不足から銭貨の鑄造量不足と軽小化は避けられず、456年には「四銖」の銭銘をなくしたほか、重さは最後には二銖程度（1g前後）にまで軽量化したとされている。民間にも「四銖」銭の鑄造を認めたこともあり軽小・悪銭化が進み、一貫文（1000文）の銭さしを作っても長さが三寸（約10cm）にも満たない「鸞眼銭」（「剪輪銭」の一種で従来のものより更に軽小化）や、鉛などを多く含み水に浮かぶほどの「縷環銭」など劣悪な銭貨が流通する状況となった。このため、466年には宋王朝になってから鑄造された銭の流通を停止し、旧銭（良銭）のみ流通を認めることで悪銭化による混乱を収束しようとした。

続く「齊」（479～502年）の時代には新たな銭貨が鑄造・発行されることはなく、「梁」（502～557年）の時代には、銭貨不足のなかで銭の流通は長江流域に限られ、長江流域以外では穀物や布帛が貨幣として使用されていたとされている。梁は、銅銭の不足を解消するため523年、鉄の「五銖」銭を発行する。しかしこの鉄銭は盗鑄が容易であったことから、大量の悪銭流通を招き、極端なインフレを引き起こす結果となった。また、旧銭などの数少ない良銭は貴族などの富裕層に集中・退蔵されていたが、良銭が不足し所有量が減少するなかで貴族の俸禄も鉄銭で支給されたため、南朝の貴族層にも大きな打撃を与えた。このため梁末期には銅銭に復し、「五銖」銘と上下に点がある「兩柱五銖」銭（10銭相当）などを鑄造・発行し銅銭の名目価値の引き上げを図るが、混乱は收拾することなく梁王朝は崩壊した。

その後、「陳」（557～589年）では、広く流通していた「鸞眼銭」10枚相当で流通させることを狙った「五銖」銭（3g程度）、次いで「五銖」銭10枚相当での流通を企図した「太貨六銖」銭（4g強）という重量感のある銭貨を鑄造・発行するが、思惑通りに流通することなく廃止された。

南朝においては、慢性的な銭貨不足と銭貨需要の高まりのなかで、原料銅の不足が制約となって銭貨の鑄造・供給が追いつかず、良銭の貴族等富裕層への集中・退蔵、悪銭主体の貨幣流通という状況を解消するには至らなかった。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

【参考文献】

川勝義雄、『魏晋南北朝』、講談社学術文庫、2003年

山田勝芳、『貨幣の中国古代史』、朝日新聞社、2000年

山岡直人、「中国貨幣の歴史13両晋（西晋・東晋）・五胡十六国時代の貨幣」、『金融研究』第25巻第1号、2006年